

ロシアの歴史認識論争：「パンフィーロフの二八人」をめぐる対立

西山, 美久
東京大学先端科学技術研究センター：特任助教

<https://doi.org/10.15017/7171742>

出版情報：政治研究. 71, pp.71-103, 2024-03-29. Institute for Political Science, Kyushu University
バージョン：
権利関係：



ロシアの歴史認識論争

——「パンフィーロフの二八人」をめぐる対立——

西山 美久

はじめに

第一節 メディンスキー・ミロネンコ論争

第一項 パンフィーロフの二八人

第二項 架空の英雄物語

第三項 英雄物語

第四項 ミロネンコの辞任

第二節 大祖国戦争史観の擁護

第一項 公文書総局の大統領直属化

第二項 称揚されるパンフィーロフの二八人

第三項 大統領による擁護

第三節 異論の封じ込め

第一項 メディンスキー再び

第二項 擁護論の主流化

おわりに

はじめに

本稿は、歴史認識をめぐるロシア国内の対立に注目し、戦勝の記憶に基づく大祖国戦争史観を擁護するプーチン政権の取り組みを明らかにすることを目的にしている。とりわけ本稿では、一九四一年一月に始まったナチス・ドイツによるモスクワ侵攻で祖国防衛に尽力したとされる「パンフィーロフの二八人」の解釈をめぐる国内対立に焦点を当てることで、プーチン政権の対応を明らかにしていく。

大祖国戦争での勝利を絶対視するプーチン政権は、その意義を否定する言動に神経を尖らせており、近年では歴史認識をめぐる近隣諸国の動向に関心を払っている。例えば欧州では、二〇一九年の欧州議会決議に代表されるように、スターリニズムとナチズムが同等に扱われているし、また各国個別に見ると、ポーランドやチェコなどでソ連兵士の銅像が撤去されるなどしており、ロシアで大きく取り上げられている⁽¹⁾。大祖国戦争史観に真っ向から対立する近隣諸国の歴史認識にプーチン政権も黙ってはおらず、第三国や国際社会を巻き込みながらロシアの正当性を世界に向けて発信している⁽²⁾。

ロシア国内の状況に目を転じてみると、デイヴィス著『現代ロシアの歴史論争』にもあるように、ソ連が崩壊したことで今までタブーとされていた歴史問題に関心が集まり、様々な人々を巻き込んで各種議論が交わされた⁽³⁾。二〇〇〇年に誕生したプーチン政権は、大祖国戦争史観を基底にして国民の愛国心を鼓舞するなど愛国主義政策を推進している⁽⁴⁾。その流れの中で近年では戦勝に貢献したソ連国民を称揚する動きが見られるほか、二〇二〇年七月にはモスクワの北西に位置するトヴェリ州の都市ルジェフで新たな戦勝記念碑が建設され、プーチン大統領が除幕式に参加した⁽⁵⁾⁽⁶⁾。

国民の愛国心涵養を狙った類似の試みとして、一般の人々が書いたエゴ・ドキュメントへの関心も生まれ、学校や生徒を巻き込んだ歴史実践が展開されている。二〇一五年には大祖国戦争七〇周年を記念し、個人由来の文書の展示会も

開かれた。⁽⁷⁾ 独立系調査機関レヴァダ・センターが一九九九年から二〇二〇年の間に実施した調査によると、戦勝が誇りを喚起すると答えた国民は圧倒的に多く、その割合は八〇%以上を記録した。⁽⁸⁾

こうした中、共産党などの左派政党は戦勝を基底にしつつ独自の歴史認識を示している。例えば、独裁者と評されるヨシフ・スターリンについて、ソ連を戦勝に導いた指導者として再評価する動きが表面化し、その流れの一つとしてヴォルゴグラードを「スターリンの町」を意味する旧称スターリングラードへ戻す運動が続けている。⁽⁹⁾ 共産党が独裁者とされるスターリンの再評価を求めているとはいえ、戦勝を中核に添えていることに変わりなく、現代ロシアで主流となっている戦勝を重視するプーチン政権の大祖国戦争史観と大きく乖離しているわけではない。⁽¹²⁾

このように戦勝が称揚されつつも、ロシア国内で異なる見方が一部提出されているのも事実であり、戦勝の記憶めぐって議論がなされている。例えば、反体制派の活動家として知られるウラジーミル・カラムルザは二〇一五年五月、出演したラジオ番組でスターリン体制とナチス・ドイツには類似点が多いと発言したほか、同じ時期にジャーナリストのアントン・ポポフも同様に両者を同一視する記事を発表した。⁽¹⁴⁾

こうした中、大祖国戦争史観の正当性を担保するためにプーチン政権が異論封じ込めを行ったケースとしてロシアメディアでも大きく注目されたのが、「パンフィーロフの二八人」をめぐる議論である。詳細は本文で言及されるが、ここで簡単に説明すると、一九四一年一月にモスクワに攻め込んだナチス・ドイツを撃破して戦勝に尽力したとされる「パンフィーロフの二八人」について、ロシア国立公文書館の館長は公文書の記述に基づき彼らの存在を否定したところ、大祖国戦争史観を正当化するウラジーミル・メディンスキー文化相らが同館長の否定発言に不快感を示し、擁護論を積極的に展開したことで、最終的に同館長が解任されるに至った。

歴史認識は外交政策の俎上に載せられると同時に、国内対立も惹起する重要なイシューである。その意味で、特に「パンフィーロフの二八人」の解釈に起因するロシア国内の論争に着目し、大祖国戦争史観の正当化に努めるプーチン政権

の取り組みを明らかにする作業は、愛国主義政策との関係においても意義あるものだと言えよう。⁽¹⁵⁾

以上の問題意識に基づき先行研究を見ていくと、プーチン政権下における歴史政策に焦点を当て、とりわけ政権が歴史を利用している点が強調されている⁽¹⁶⁾。また、プーチン期のロシアにおける「歴史の政治」に焦点を当てた論文集も刊行され、政権による歴史利用を基本認識として、戦勝に関連させたスターリンの再評価や、歴史認識に関する法整備などを扱った論考が収められている⁽¹⁷⁾。ロシア政治を専門にする米ジョージ・ワシントン大学教授のマルレーヌ・ラリュエルは『ファシズムとロシア』と題する研究書を発表し、プーチン大統領が大祖国戦争での勝利を活用していると説明している⁽¹⁸⁾。ロシア人研究者の研究成果にも目を配ると、例えばサンクトペテルブルク大学教授のニコライ・コポソフは著書『厳格な体制下の記憶——ロシアの記憶と政治』の中で、他の先行研究と同様にプーチン体制下で戦勝が利用されている点を強調しつつ、これは「ロシアを形作る神話」だと指摘している⁽¹⁹⁾。

このように歴史、とりわけ大祖国戦争での勝利がプーチン政権によって利用されている点は先行研究が指摘するとおりであり、本稿もそれを否定するものではない。もつとも、歴史認識に関する政権の取り組みをより細かく見ていくと、先行研究がその特徴として注目するスターリンの再評価に収斂されることはなく、むしろ先述の「パンフィーロフの二人」をめぐる論争の鎮静化を図る同政権の取り組みも注目されるべきであろう。つまり、ロシアと近隣諸国の対立のみならず、国内対立にも目を配ることで、大祖国戦争史観を正当化するプーチン政権の取り組みをより詳細に理解できると思われる。

以上を踏まえ、本稿では、まず第一節で事の発端となった公文書館長ミロネンコと文化大臣メデインスキーによる歴史認識論争を取り上げることにした。第二節では、この論争を受け、パンフィーロフの二八人を擁護することで大祖国戦争史観の正当化を図るプーチン政権の対応を説明していく。そして第三節では、かかる方針を受け、異論封じ込めを進め、ロシアのアイデンティティの中核とする大祖国戦争史観を擁護する同政権の取り組みを示したい。そして最後

に、本稿全体をまとめるとともに、ブーチン政権下における歴史認識問題に関する今後の展望にも触れ、稿を閉じたい。

第二節 メディンスキー・ミロネンコ論争

第一項 パンフィーロフの二八人

一九四一年七月から八月にかけて、ソ連軍のイヴァン・パンフィーロフ少将率いる第三一六狙撃師団が組織され、師団兵士はロシア人以外にも、カザフ人やキルギス人など多様な民族から構成された。⁽²⁰⁾ この第三一六師団は、指揮官のパンフィーロフ少将にちなんで「パンフィーロフ師団」と呼ばれることになった。

一九四一年九月三〇日にドイツ国防軍がブリャンスクに進軍、一月一六日にはモスクワ近郊まで接近した。「タイフン作戦」のもとソ連に攻め入ったドイツ国防軍とソ連軍のパンフィーロフ師団が、モスクワ近郊のドゥボセンコ村で戦闘を開始した。

ここでは、この戦いを詳述したソ連国防省機関紙『赤星』の報道に基づき、パンフィーロフの二八人について確認したい。一九四一年一月二七日付けの報道によれば、パンフィーロフ師団は首都モスクワへと迫るドイツ国防軍の戦車隊を相手に奮闘した。ドイツ国防軍が進軍を続ける中、同師団はドイツ国防軍の戦車隊に勇猛果敢に立ち向かい、多数の将兵を仕留めたほか、戦車も鹵獲した。⁽²¹⁾ 翌二八日には「斃れた二八人の英雄の遺言」と題する記事が掲載され、「パンフィーロフ師団に属した二八人の勇敢な兵士たちは、宿敵に対する勝利のために、粘り強さ、堅固さ、忍耐力、そして死をものともしない精神を〔国民に〕示した」とし、ドイツ国防軍の侵攻を食い止めた「二八人」について初めて触れた。⁽²²⁾ 一九四二年一月二二日には、犠牲となった二八人全員の氏名が紹介され、彼らの偉業がより詳細に伝えられた。⁽²³⁾ こうして、この二八人は祖国防衛に尽力した英雄として称揚されることになる。

師団を率いたパンフィーロフは一九四一年一月一日に戦死、モスクワ市内のノヴォテールヴィジ修道院墓地に埋葬された。首都モスクワをドイツ国防軍から守り抜いたその功績が評価され、死後、ソ連邦英雄の勲章が追贈された。⁽²⁴⁾一九四二年七月には、この二八人に対してもソ連邦英雄の勲章が死後に追贈され、勲章追贈を決めたソ連最高幹部会令が共産党機関紙『プラウダ』の一面に掲載された。⁽²⁵⁾その後パンフィーロフの二八人を扱った書籍が出版されるなど、国民の愛国心を涵養する重要な英雄物語の一つとされた。⁽²⁶⁾彼らを英雄視する動きは続き、一九六六年にモスクワ市の西北部に「パンフィーロフの英雄通り」が新たに設けられた。⁽²⁷⁾戦勝三〇周年にあたる一九七五年五月には、彼らの功績を称えてモスクワ州のドウボセコヴォ村に高さ二五メートルに及ぶ兵士を模した記念碑が建設された。⁽²⁸⁾

パンフィーロフの二八人の功績が称揚される中、一九八五年にはソ連軍将官や歴史学者らが名を連ねた『大祖国戦争大百科事典 一九四一—一九四五』が出版された。それによれば、パンフィーロフ少将率いる第三一六狙撃師団の兵士たちはドイツ国防軍に対して英雄的に戦ったとされ、特に一九四一年一月一日に始まった侵攻でパンフィーロフの二八人が首都モスクワの防衛に尽力したと説明されている。⁽²⁹⁾

彼らの功績は現代の歴史教科書にも記述されており、⁽³⁰⁾祖国防衛に尽力した赤軍兵士の英雄物語の一つとして後世に語り継がれている。以上のように、パンフィーロフ師団、とりわけパンフィーロフの二八人の活躍ぶりはロシア国民の愛国心を鼓舞する重要な物語の一つだと言える。

国会（下院）でもパンフィーロフの二八人についての言及があり、その一例を挙げると、二〇〇六年十二月に愛国主義について発言する機会のあった共産党のボリス・キビレフ議員は、「モスクワ近郊でナチスの戦車を止めたパンフィーロフ師団の活躍は国民の多くが知っている」⁽³¹⁾と指摘していることから、ロシアでは愛国シンボルの一つとして理解されていると言える。

なお、カザフスタンおよびキルギス出身の兵士が同師団の構成員として多数動員されていたこともあり、カザフスタ

ンのアルマティ市に「二八人のパンフィーロフの英雄広場」が、キルギスの首都ビシュケク市内の中心部には「パンフィーロフ公園」がある。⁽³³⁾パンフィーロフ師団の活躍は、ロシア、カザフスタン、キルギスを結び付ける共通の戦勝の記憶なのかもしれない。⁽³⁴⁾

第二項 架空の英雄物語

ところが、ロシア国立公文書館の館長セルゲイ・ミロネンコは二〇一一年七月、日刊紙『コムソモリスカヤ・プラウダ』の取材でロシア史について語りつつ、大祖国戦争についても触れ、「英雄的な活躍をしたパンフィーロフの二八人が実は存在していなかったと知ったときは驚いた」と語った。⁽³⁵⁾

歴史教育でパンフィーロフの二八人について学んだ記者は、「パンフィーロフの二八人による活躍が子供たちの愛国心を育んできた」と質すと、ミロネンコは次のように説明した。「亡くなったとされた兵士たちが一人、また一人と現れるようになり、パンフィーロフ師団の中で英雄的な死を遂げた兵士は存在しなかったのではないかとの疑問が一九四八年時点の段階で出されたこともあり、当局は事の真相を調査し始めた。当局が見つけ出したパンフィーロフ師団を構成した連隊の長が語ったところによれば、ドゥボセコヴォ村でナチス国防軍との戦闘は無かった。この発言を受け、当局はパンフィーロフの二八人の活躍ぶりを記事にした記者に真相を問い質すと、その記者は戦意高揚を目的に何らかの功績を見つけ出すようにとの指示が上司からあり、そうした中、ドゥボセコヴォ村で戦闘があったとの話を聞きつけ、記事にしたと明かした」。プーチン政権が推進する大祖国戦争史観の正当性を否定しかねない内容だったこともあり、同紙は「国立公文書館の秘密」と題し、ミロネンコ発言を詳報した。⁽³⁶⁾

ミロネンコは公文書館の館長を務める傍ら、モスクワ国立大学歴史学部で教鞭をとる歴史学者でもあることから、彼の発言はロシア国内で大きな反響を呼んだ。例えば、一九八七年から一九九一年までソ連国防相を務めたドミトリー・

ヤーゾフは、自身が大祖国戦争に参加した経験もあることから、ブーチン政権が重視する大祖国戦争史観を擁護しており、ミロネンコ発言を明確に否定している。九月二日付けの日刊紙『ソヴィエツカヤ・ロシア』に寄稿したヤーゾフは、パンフィーロフの二人について次のように指摘している。「ミロネンコ氏はパンフィーロフの二人の英雄的な偉業を神話と呼び、首都モスクワ防衛の記憶を恥ずかしげもなく嘲笑した。後に明らかになったように、確かに二人の英雄全員が犠牲になったわけではない。……重症を負った者、……捕虜となった者などいた。(それでも)パンフィーロフの二人は並外れた動員力を発揮し、それがスターリングラードやレニングラードの防衛者たちに対する不屈の精神の模範となった。敵の動きを止めた英雄たちの功績は疑いようがないものだと思っている。……ミロネンコ氏のように自国の歴史を忌み嫌う人物が教育者・歴史家と名乗って良いのか疑問に思うところがある」⁽³⁸⁾。

またヤーゾフは、ミロネンコのインタヴュー記事を掲載した日刊紙『コムソモリスカヤ・プラウダ』においても肯定論を展開し、パンフィーロフの二人の偉業を擁護した。その内容には『ソヴィエツカヤ・ロシア』紙での主張を繰り返しているものの、他方で今回は「亡くなったとされた二人のうち誰かが存命だったとしたら、モスクワを守り抜いた彼らの功績は無に帰するのか」との疑問を投げかけ、これに対し「そんなことはない」と喝破する文言を追記している。⁽³⁹⁾ミロネンコを意識して『コムソモリスカヤ・プラウダ』紙にも擁護論の掲載に踏み切ったのかもしれないが、いずれにせよ、パンフィーロフの二人を否定するミロネンコの主張を不当だと指摘している。

ヤーゾフはミロネンコ発言を意識したのか、新聞紙上での意見表明のみならず、『祖国防衛戦争におけるパンフィーロフの兵士たち』と題する計二二〇ページの書籍を二〇一一年に出版し、パンフィーロフの二人の功績を強調した。⁽⁴⁰⁾ヤーゾフの主張に与する専門家も論文などを発表し、ミロネンコの主張を荒唐無稽だと貶している。例えば、ロシア科学アカデミーロシア史研究所のコンスタンチン・ドロズノフは、月刊誌『祖国』に寄稿し、祖国防衛に尽力したパンフィーロフ師団を称えつつ、「英雄は二人だけではない」とし戦勝に貢献した人々全てを英雄にすべきとの拡大解釈論を提示

した。⁽⁴¹⁾

擁護論が専門家から提出される中、ヤーゾフは二〇一四年に六〇〇ページ以上になる自伝を執筆し、出生からソ連国防相就任に至るこれまでの半生を振り返っている。その中で、パンフィーロフの二人にも触れており、愛国心に溢れる彼らの戦いによって祖国は守り抜かれたと指摘し、ミロネンコの否定論を全否定したのであった。⁽⁴²⁾

ヤーゾフを中心に擁護論が展開される中、ミロネンコは自身の立場を正当化することに努めた。二〇一五年四月、全国紙『コメルサント』の取材に対して、プーチン政権の歴史認識とは異なる独自の見方を改めて披露した。彼は、パンフィーロフの二人はソ連国防省機関紙『赤星』の編集部によって作り上げられた架空の物語であり、その後、小説家らによってソ連国内に拡散されたと説明した。彼によれば、この二人は祖国防衛のために英雄的に亡くなり埋葬されたものの、一九四二年になると埋葬された人物名を名乗る人が次々に現れるようになり、八人目が現れたところで当時の捜査当局が本格的調査に着手するに至ったという。『コメルサント』紙の記者は歴史の授業で学んだ史実とは異なっていると疑問を呈するが、ミロネンコは「『自説の根拠となる』公文書がある」と反論。これに対し記者は「『赤星』の記者が美化したり考え出したりしても、『祖国防衛という』偉業は不変ではないのか」と質すと、ミロネンコは「記者は考えたのではなく、『存在しないものを事実であるかのように話を』でっち上げた」と答えた。そして、ミロネンコは自身の発言の裏付けとして、公文書館が保存する軍最高検察作成の報告書を記者に見せた。⁽⁴³⁾

大祖国戦争史観の正当性を否定しかねない解釈だったこともあり、国民の関心も高く、同報告書を公開すべきとの声がロシア国立公文書館宛に多数寄せられた。国民からの声を受け、同文書館は二〇一一年からパンフィーロフの二人の存在を否定してきたミロネンコが根拠とする一九四八年一〇月九日付け軍最高検察作成の全一五ページからなる報告書を文書館のウェブサイトに公開した。

それによると、軍検察は一九四七年一月にイヴァン・ドロビバンなる人物を国家反逆罪で拘束、捜査の過程で『パ

『ソフィーロフの二八人』と題する書籍を所持していることが明らかとなった。ドロビバンはパンフィーロフの二八人のうちの一人であった。彼に尋問を続けると、いかなる英雄的な活動も行っておらず、書籍の内容は事実と一致しないことが明らかになった。ドロビバン以外にも生存者が四人いたが、英雄的な死を遂げたとしてパンフィーロフの二八人に加えられた。これを受け、軍検察は事実確認を行ったところ、一九四一年一月にソ連国防省機関紙『赤星』がドゥボセコヴォ村での戦いを初めて取り上げ、同紙はその後パンフィーロフの二八人の英雄的な戦いを報道し、一九四二年には彼らの死後にソ連邦英雄の勲章が授けられた点も伝えた。ところが、生存者が判明したこともあり、軍検察は、「パンフィーロフの二八人」は同紙の記者らによって創作された架空の物語だと結論付けた。⁽⁴⁴⁾

同報告書は党中央委員会書記アンドレイ・ジダノフに送られたが、パンフィーロフの二八人は否定されなかった。もともと、文芸誌『ノーヴィ・ミール』一九六六年二月号にこの二八人の英雄物語に疑問を呈する記事が発表された⁽⁴⁶⁾が、ソ連崩壊後には同誌一九九七年六月号にロシア国立公文書館が保存する軍最高検察作成の報告書が掲載されるなど、⁽⁴⁷⁾ミロネンコ発言よりも以前から異論が提示されていたようだ。今回、戦勝を重視するブーチン政権下で公文書館長を務めるミロネンコが改めて疑問を呈したことで注目を浴びた形となった。

さて、ミロネンコは少なくとも二〇一一年からパンフィーロフの二八人の功績を否定する発言を公にしており、それはブーチン政権が重視する大祖国戦争史観の正当性を否定しかねない解釈であった。彼の発言に対する批判は続いており、ミロネンコ批判を続けてきたヤーズフは、政府機関紙『ロシア新聞』のインタヴューで「パンフィーロフの二八人やパンフィーロフ將軍について知る若者が少ない」と現状を嘆きつつ、その原因の一つにミロネンコ発言があると捉えているのか、「歴史の歪曲は常に政治的に発注」されたものだと言った。そして、パンフィーロフの兵士たちの功績は後世に語り継がれるべきものだと言った。⁽⁴⁸⁾

しかしミロネンコは、『コメルサント』紙のインタヴューから時間を置くことなく、同種の発言を繰り返した。二〇一

五年六月にモスクワで世界のロシア語メディアの関係者を招いた第一七回国際ロシア語プレス会議が開催され、セルゲイ・イヴァノフ大統領府長官（当時）やセルゲイ・ナリシキン下院議長（当時）などが出席したほか、国営タス通信の代表や政府機関紙『ロシア新聞』の編集主幹がロシア語メディアの役割などについて語った。⁽⁴⁹⁾

この会議に挨拶を寄せたプーチン大統領は、「今年の国際大会は戦勝七〇周年の年に開催される。我々共通の歴史的記憶を守るということは、内外のロシア語メディアにとって中心的テーマとなっている。第二次世界大戦に関する公正公平な報道や、歴史的事実の改ざんに対して、皆さんが重要な役割を担っていると思う。戦勝は甚大な被害の結果であり、その結果を見直したり、修正したりする権利は誰にもない」と指摘。⁽⁵⁰⁾ こうした中、登壇者の一人として招待されたミロネンコはロシア史について語りつつ、パンフィーロフの二人にも言及し、記者による作り話だというこれまでの主張を強調した。⁽⁵¹⁾

会議では、ミロネンコの発言に対して批判を口にする聴衆もいた。会場で発言した日刊紙『コムソモリスカヤ・プラウダ』のカナダ特派員は、「否定的な意見ばかりを集めている。カナダの政治家の話を聞いている気分だ」と感情交じりに述べたほか、旧ソ連諸国からの参加者もミロネンコ発言に「驚いた」と述べていた。⁽⁵²⁾

これに対し、ミロネンコは後日、独立系ラジオ番組「モスクワのこだま」に出演し自説の正当性を主張しつつ、会議で提出された反対論も意識したのか、「英雄パンフィーロフの名を冠した通りや、パンフィーロフ師団の記念碑などは全くもって当然のことだ。仮に二八人の英雄が存在せず、この二八人の功績が創造の物語だったとしても、祖国防衛に貢献したパンフィーロフ師団そのものの貢献がなかったということにはならないはずだ。パンフィーロフ師団は存在し、モスクワ防衛に決定的な役割を果たした」と述べ、⁽⁵³⁾ これまでの説明を若干修正して同師団の功績を認めたものの、「二八人」という数については疑義を呈した。

第三項 英雄物語

ミロネンコがパンフィーロフの二八人の存在を否定する発言を続ける中、退役軍人ヤーゾフを中心に擁護論が展開されたが、それに文化相のウラジーミル・メディンスキーも加わり、プーチン政権が重視する大祖国戦争史観に寄り添った発言を繰り返した。その流れで、パンフィーロフの二八人も肯定する発言を繰り返し、祖国防衛に貢献した点を強調した。二〇一五年は戦勝七〇周年記念の年であり、戦勝記念式典の準備に関する大統領令が出されるなど国内で戦勝ムードの演出が図られる中、メディンスキー自身も戦勝関連のイベントに出席し、その意義を語った。⁽⁵⁴⁾ そうした中でミロネンコ発言であり、メディンスキーは大祖国戦争史観の正当性を否定しかねない見解を看過できなかったのかもしれない。実際、戦勝に貢献した英雄らを称える書籍や記事を過去に執筆していた。⁽⁵⁵⁾ 文化相の立場にありながら、ミロネンコへの批判を公然と行うようになった。

メディンスキーは二〇一五年七月にロシア経済紙『RBC』のインタビューに応じ、パンフィーロフ師団に所属した兵士の正確な犠牲者数は不明だが、それが二八人なのか一三〇人なのか分からない、と指摘。二八人という数字については、『赤星』の記者が当時判明していた犠牲者数を記し、あくまでも歴史研究ではなく報道というレベルに過ぎない説明し、最後に「このテーマについて不快な口論を止めるべきだ」と論じた。⁽⁵⁷⁾

メディアで擁護論を提示しつつ、メディンスキーは七月末に文化省で公文書館の幹部を集めた会議を実施した。その場にはミロネンコや複数の関係者が出席した。メディンスキーは会議で公文書の保存期間短縮の可能性について述べつつ、パンフィーロフの二八人をめぐるミロネンコ発言を意識して、「公文書館の職員が何をなすべきか、という問題はある。……〔公文書館のトップは〕作家でも、ジャーナリストでも、歴史歪曲に抗する闘士でもない。アーカイヴィストの役割は公文書を提供することであり、結論はジャーナリスト〔など〕が出す」と指摘し、名指しこそ避けつつ会場に居合わせたミロネンコを批判した。⁽⁵⁸⁾

その様子は国営テレビ局のニュース番組でも取り上げられたが、放送では右発言のほか、「もし職業を変えたいという希望があれば、我々〔文化省側〕は理解する」とのメディンスキーの追加コメントも放送された。⁽⁵⁹⁾ 独立系新聞『ノーヴァヤ・ガゼータ』は、大祖国戦争史観を否定しかねない解釈に不満を持つメディンスキーの発言を取り上げて「政権は即座に反応した」と伝えたほか、最後の追加コメントを「国からの」解雇請求という直接的脅威⁽⁶⁰⁾ だとした。

メディンスキーは文書館職員を前にして自身の考えを伝えたものの、それでは満足できなかったのか、二〇一五年八月に週刊誌『論拠と事実』のインタヴューで、パンフィーロフの二八人に関するミロネンコ発言を次のように否定した。曰く、ミロネンコが紹介した軍検察による報告書以外にも、ドイツ国防軍との攻防に参加した生存者への聞き取り調査報告書も残っており、それによれば、確かにドイツ国防軍との攻防は行われ、パンフィーロフ師団は二〇両以上の戦車を捕捉した。また、攻防の初期段階では戦闘が数日続き、一三〇人いた部隊の兵士が一〇〇人犠牲となった。偉業や神話を考え出す必要はなく、というのも戦時下では国民皆が丸となって祖国防衛のために英雄主義を発揮した。⁽⁶¹⁾ メディンスキーは、これまでのミロネンコ発言について、戦勝に貢献したパンフィーロフ師団の活躍自体を否定していると非難した。

メディンスキーによるミロネンコ批判は終わりを見せず、同月末に政府機関紙『ロシア新聞』のインタヴューで批判をより鮮明に行った。まず、インタヴューの冒頭で「真実を語る必要がある。我々の歴史の真実は、扇動者が考え出すあらゆる話に比べて面白いものだ」と発言、政権にとって都合の悪い異論を認めない姿勢を示した。その上で、「パンフィーロフの兵士のように壮大なソ連の英雄たちについて、教会で列聖された聖人のように扱われるべきだ」と指摘。ミロネンコがパンフィーロフの二八人を否定しつつも、独立系ラジオ番組「モスクワのこだま」でパンフィーロフ師団が戦勝に貢献したという指摘をしたことについては、「偉業に対する主観的で否定的な評価は、結果なしでは裏付けできない」と一蹴した。⁽⁶²⁾

戦勝七〇周年にあたる二〇一五年以降、メディンスキーを中心に擁護論が展開されたが、他方でロシア国民の多くが大祖国戦争を記憶していることもあり、ミロネンコ発言に対する苦言は広く見られた。例えば二〇一五年二月、ロシア自由民主党の党首ウラジーミル・ジリノフスキーはプーチン大統領などが出席した会議で、「〔ミロネンコ発言を念頭に置き〕いったいどういうことだ。自分の兄は〔大祖国戦争で〕亡くなっており、その証明書もある。……〔戦時下では〕様々な師団が組織され、多数の兵士が犠牲となった。犠牲となった彼らは英雄だ」と述べ、否定論に疑問を投げかけた。⁽⁶³⁾ また、パンフィーロフ少将の孫娘アイグリは、今回の論争について「非常に痛ましいテーマ」であり、そもそも議論の対象にはなり得ないとの立場を示した。⁽⁶⁴⁾

第四項 ミロネンコの辞任

メディンスキーが中心となつてミロネンコ批判を展開したことで、パンフィーロフの二人をめぐるとの対立がメディアの関心を集めた。関係者の次なる発言が注目される中、ミロネンコは二〇一六年三月一六日、ロシア国立公文書館の館長を辞任し、その後は同文書館の学術指導者としての立場で職務に当たることになった。この辞任について、メディンスキーとの確執が原因との噂もあったが、両者はそれを否定した。

メディンスキーはタス通信のインタヴューで、「ミロネンコ氏は解任されたわけではなく、また自分からの個人的な〔解任〕要求でもない」と説明した上で、「〔パンフィーロフの二人を否定するミロネンコ発言について〕不道徳で、非科学的なものだ。〔国立公文書館に努める〕国家公務員たるアーキヴィストが科学的に疑わしいイデオロギーの旗振り役であるべきではない」とコメントした。⁽⁶⁵⁾ メディンスキーは自身の影響力行使を否定しつつ、ミロネンコ発言への不満を改めて強調した形となった。

これに対しミロネンコは、今回の辞任について「自ら決めたこと」と言明した。その上で、その理由については「〔一

九九二年から）二三年にわたって館長を務めており、「在任期間が」長いと感じないだろうか。辞任について疑義を挟む余地はない」と説明した。そして、今後は学術指導者としての立場で公文書館の仕事に携わると明かした。⁽⁶⁶⁾ 今回の辞任は海外メディアからも注目され、ミロネンコはチェコのプラハに拠点を置くテレビ局「カレントタイム」の取材に応じた。その際、自身の辞任は自発的なものだとし強調したほか、メディンスキーと二回面会し、公文書館での仕事を継続したい旨を述べたと明かした。⁽⁶⁷⁾

両者の発言を文字どおり受け取ると、今回の辞任はあくまでもミロネンコの判断ということになるが、『ファシズムとロシア』の著者ラリユエルは、「[パンフィーロフの二八人の功績を否定する]スタンスは所長の地位を代償とした」とし、ミロネンコの歴史解釈が解任の原因だと示唆している。また、前出のテレビ局「カレントタイム」は、文化相との対立が要因だと伝えている。⁽⁶⁸⁾ ロシアの歴史認識問題などを研究する欧州大学教授アレクセイ・ミレルは、シベリア西部の都市チュメニで開催された歴史認識に関する講演会で、今回の対立も引き合いに出し、ミロネンコ発言が原因で解任されたとの見方を示した。⁽⁷⁰⁾ いずれにせよ、今回の対立はミロネンコの辞任というか形で幕を閉じた。

では、なぜパンフィーロフの二八人を擁護する必要があったのだろうか。この点、アレクセイ・ミレルと外交評論家のヒョードル・ルキヤノフは、政権にとっての大祖国戦争史観の意味に言及している。曰く、パンフィーロフ師団についての解釈がミロネンコの指摘するとおりであれば、大祖国戦争についても同様に解釈される可能性があると指摘している。⁽⁷¹⁾ つまり彼らの主張に従えば、今回の辞任劇は、プーチン政権が国民統合に利用する愛国主義の中核要素である大祖国戦争史観を擁護することが背景にある。それを示すように、プーチン大統領はパンフィーロフの二八人について、メディンスキーの立場に寄り添うかのように振舞うのである。

第二節 大祖国戦争史観の擁護

第一項 公文書総局の大統領直属化

その手始めの作業として、プーチン大統領は二〇一六年四月四日、ロシア国立公文書館など各公文書館を束ねる行政組織である「ロシア連邦公文書総局」を大統領直属にする大統領令に署名した。同大統領令の冒頭には「行政システムを改善するため」と記されており、少なくとも「紙の上」では、メディアを賑わせた歴史認識をめぐるミロネンコ発言が原因ではなかったようだ。

この公文書総局とは、ロシアにおける公文書の保存や公開に関わる事務を担う行政組織であり、世界各国の研究者等が利用する「ロシア国立公文書館」や「ロシア政治社会史公文書館」などを束ねている。⁽⁷³⁾もともとは、一九九二年六月にソ連時代から存在したソ連政府付属公文書委員会は「ロシア連邦公文書庁」と改組され、独立した行政組織の一つとなった。⁽⁷⁴⁾二〇〇四年に省庁改編の一環で文化省所轄の公文書総局に改組され、二〇一六年四月に大統領直属の組織とされた。

プーチン大統領は公文書局の大統領直属化を決定後、二〇一六年四月四日に公文書総局長の人事に関する大統領令にも署名し、二〇〇九年から公文書総局長を務めていたアンドレイ・アルティゾフ⁽⁷⁵⁾を引き続き同じポジションに据え置いた。⁽⁷⁷⁾同日、アルティゾフを大統領官邸に招き、その冒頭で今後は公文書局を大統領直轄にすると改めて口頭で伝えた。そして、今回の決定を正当化するにあたり、プーチン大統領は「公文書館が保有する各種文書は国家にとって重要な価値あるものであり、公文書総局を大統領直属にする決定を下した」と指摘。これに対してアルティゾフは「今回の決定に感謝申し上げる」と今回の決定を支持する発言をし、その後は公文書総局の今後の取り組みについて資料を使いながら説明した。⁽⁷⁸⁾国営テレビ局「第一チャンネル」のニュース番組も今回の面談を伝え、プーチン大統領の発言も取り上げ

られた。⁽⁷⁹⁾ また、ミロネンコが館長を務めたロシア国立公文書館のウェブサイトで両者のやり取りが公開されている。⁽⁸⁰⁾

プーチン大統領との面会后、政府機関紙『ロシア新聞』は、六月六日にアルティゾフ局長を囲む会を開催すると告知した。⁽⁸¹⁾ 記者会見では、公文書館職員の給与や今後の計画などのほか、公文書総局の大統領直属化についても質問が及んだ。これに関し記者が「今回の措置に伴い」『記憶の倉庫』〔公文書〕へのアクセスが制限されるのではないかと質すと、アルティゾフは「大統領直属化されることで、法規則、公文書の直接管理が同一人物の管理下になる」と答え、今回の決定への支持を改めて表明した。⁽⁸²⁾ ミロネンコ辞任について聞かれると、「彼は学術活動に携わりたいと語っている。自分から本件について補足することはない。彼は今、学術指導者としての立場で展示会を企画開催するなどして自らの職責を果たしている」と述べ、メディンスキーとの論争は無関係だと強調した。⁽⁸³⁾ また、ペスコフ大統領報道官も同様にミロネンコとの関係性を否定し、「公文書総局の重要性に鑑み、大統領直属化が検討され、それに応じて同局の格上げが議論されていた」と明かした。⁽⁸⁴⁾

プーチン大統領は二〇一六年六月二十六日、公文書総局の所掌事務などをまとめた大統領令に署名し、その冒頭には「ロシア連邦大統領が公文書総局の活動を監督」し、「総局長は大統領によって任命・解任される」と明記されている。こうして、同局は大統領直属を受けての新体制下で活動を始めることになった。⁽⁸⁵⁾

こうした中、大統領直属に改組された背景を探るメディアも現れてきた。例えば、ロシア経済紙『ヴェドモスチ』の取材に応じた独立系シンクタンク「政治工学センター」のアレクセイ・マカルキン副所長は、「プーチン大統領や政府高官等は歴史に度々言及しているのは、その中に国家の礎の一例を見出そうとしており、自らの正当性を担保しようとしている」と説明している。⁽⁸⁶⁾ これはまさに、ペスコフの言う「公文書総局の重要性」や、プーチン大統領が言う「国家にとって重要な価値あるもの」との発言に現れていると同紙は解説している。⁽⁸⁷⁾ これは、先に言及したミレルやルキヤノフの指摘とも重なる部分があり、つまるところ、パンフィーロフの二八人を肯定して戦勝神話を基底にするロシアの歴史

認識を擁護することで、政権にとって都合の悪いミロネンコ発言を排除したのであろう。

ミロネンコ自身、独立系ラジオ局「フリー・ヨーロッパ・ラジオ」の番組に電話出演した際、「メディンスキー文化大臣と自分の間で生じた決定的な対立は最良の形で解決された」と述べつつも、その対立が「今回の決定〔大統領直属化〕に繋がったと思う」と吐露した⁽⁸⁸⁾。

第二項 称揚されるパンフィーロフの二八人

ミロネンコ発言を公の場で繰り返し批判してきたメディンスキーは、大祖国戦争史観の一要素である「パンフィーロフの二八人」の正当性を担保するために、映画製作にも関与することにした。ミロネンコがパンフィーロフの二八人の存在を否定する中、二〇一三年の段階で映画監督アンドレイ・シャロパは、この二八人を題材にした映画を製作すると発表した。この報を受けると、メディンスキーは文化相という立場にありながらも、「プロジェクトを支持する」との意思を示した⁽⁸⁹⁾。

映画監督シャロパはクラウドファンディングで映画製作費用を集めはじめ、二〇一三年時点で一五〇万ルーブル（日本円で三〇〇万円）の費用を集めた⁽⁹⁰⁾と報じられたが、二〇一四年一月にはその額が三二〇万ルーブル（日本円で約六四〇万円）に達するなど支援金が増えながらも、他方で制作費用がかさむことも判明し、更なる資金調達が求められた。そうした中、パンフィーロフの二八人の存在を肯定するメディンスキーの意向を受けてなのか、国営ニュースチャンネルの報道によると、文化省は二〇一五年に当該映画の製作費用として約三千万ルーブル（日本円で約六千万円）の補助金を支給すると発表した⁽⁹²⁾。モスクワ市が発行する大衆紙『夕刊モスクワ』は同映画について取り上げ、記事の冒頭で「多くの国民から募金が得られた」と紹介しつつ、「文化省からの支援も得て映画製作が進められている」と伝え、政府からのバックアップも強調した⁽⁹³⁾。

文化省からの資金援助で製作費用が集まり作業が進められる中、『ロシア新聞』は監督のシャロパにインタヴューを実施し、ミロネンコ発言の影響を問うたところ、彼は「戦時下では多数の偉業が存在したであろう。数百、数千の英雄的な話である」と一般論を述べ、その上で「一九九七年の段階で軍最高検察作成の報告書が『文芸誌』『ノーヴィ・ミール』に発表されていた。むしろ自分は、『ミロネンコ発言を受け』メディアが『神話の否定』と報じたことに怒りを覚えた。軍最高検察の報告書を読むと、偉業がなかったとの証明はなされていない」とミロネンコの主張に疑問を呈した。⁽⁹⁴⁾

二〇一五年一月には約二分の映画の予告編がインターネット上に公開され、『ロシア新聞』によれば、その再生回数は公開当日に一〇〇万回を記録したという。⁽⁹⁵⁾ 一月一〇日にはマスコミ向けの試写会が行われ、『ロシア新聞』の記者も参加した。その記者によれば、映画は「(ロシア)映画財団、ロシア文化省、ロシア軍事・歴史協会の支援により製作された」との謝辞が映し出されてから始まった。試写会後、記者との質疑応答も行われ、監督のシャロパは「ロシア文化省は資金援助してくれたほか、カザフスタン側からの資金援助についても先方に連絡を取るなどしてくれた」と述べ、文化省のイニシアティヴを強調した。⁽⁹⁶⁾

二〇一六年一月二四日にロシア全土で映画が公開された。『ロシア新聞』によると、ロシア在住者の四人に一人が当該映画を鑑賞した。⁽⁹⁷⁾ ロシアの戦争映画を分析したロシア人研究者によれば、この映画は国内で高い関心を喚起したようであり、国民の資金援助を受けて製作された映画の中で最も成功した作品の一つだという。⁽⁹⁸⁾ このような結果は他にもあり、例えば、政府系調査機関の全ロシア世論調査センターが二〇一六年二月一七日から一八日にかけてロシア四六の地域で一八歳以上の国民一六〇〇人を対象に実施した世論調査でも、回答者の多くが「今年の映画」として映画「パンフィーロフの二八人」を選んだ。⁽⁹⁹⁾

メディンスキーは映画以外にも触手を伸ばした。映画「パンフィーロフの二八人」が公開された二〇一六年一月に彼が会長を務める「ロシア軍事・歴史協会」が主導し、モスクワ市内に所在するアパートの壁に戦勝に貢献した人物な

を描くアートプロジェクトが始まった。壁画の一つには映画「パンフィーロフの二八人」をモチーフにしたものもあり、二〇一六年一月には完成式が開かれた。その壁画の左下には同協会のロゴも描かれている。⁽¹⁰⁾ このように見てくると、映画や壁画など文化面での普及を図り、ミロネンコ発言の火消しに注力しているようだ。

第三項 大統領による擁護

プーチン大統領は公文書総局を大統領直属に改組したものの、これまでパンフィーロフの二八人をめぐる対立に自身の立場を明確に示すことはなかった。そうした中、若干時期は前後するが、プーチン大統領は二〇一六年一〇月三日から一〇月四日までの日程でカザフスタンの首都アスタナを訪問し、ナザルバエフ大統領と経済協力などについて協議した。最終日の四日、両大統領は各予定をこなした後、パンフィーロフの二八人を扱ったロシア製映画「パンフィーロフの二八人」(邦題「パトリオット・ウォー ナチス戦車部隊に挑んだ二八人」)を鑑賞した。

ペスコフ大統領報道官は記者らに対してプーチン大統領のカザフスタン出張についてコメントしたほか、「両大統領は映画を鑑賞している。また、これに先立ち、両大統領は両国の文化大臣から映画についての説明を受けた」と伝えた。続けてペスコフは、パンフィーロフの二八人をめぐって様々な議論がなされてきたが、「歴史的真相という観点で言えば、この映画は重要な意味」があり、「(パンフィーロフの二八人が)歴史上存在したとする説を支持するメディンスキー文化相の発言を紹介できる」と指摘しており、大統領報道官という立場でありながらも、パンフィーロフの二八人を擁護する発言を行った。

国営テレビ局の「第一チャンネル」は、映画視聴前に両大統領が両国文化相から映画について説明を受けたと伝えつつ、メディンスキーが両大統領を前にして映画について語る様子を放送した。⁽¹¹⁾ また、ロシア大統領府の公式ウェブサイトでは両大統領による映画鑑賞の事実が述べられたほか、「当該映画はパンフィーロフ将軍の指揮下にあった第三一六

狙撃師団の兵士たちの偉業を描いている」と紹介されている。⁽¹⁰⁸⁾ カザフスタン大統領府の公式ウェブサイトでは「ソヴィエト兵士の偉業に焦点を当てた映画」との説明が記されているほか、両大統領が映画を鑑賞する写真が一枚掲載されている。⁽¹⁰⁴⁾ いずれも、パンフィーロフの二八人の功績を肯定する書きぶりであり、ミロネンコ発言を暗に否定した。

このように見ると、プーチン大統領はナザルバエフ大統領と共に映画を鑑賞したことで、大祖国戦争史観の正当性を揺るがしかねないミロネンコの主張を退けた形となった。プーチン大統領が否定的な発言をしなかったことで、メディンスキーはミロネンコを念頭に置いてなのか、パンフィーロフの二八人の功績を否定する論者を「究極のろくでなし（*мразли конченые*）」と強い言葉で非難し、「議論すること自体が冒涇であり、彼らの偉業は象徴に他ならない」と言明した。⁽¹⁰⁶⁾

こうした中、全国紙『独立新聞』の社説は、パンフィーロフの二八人をめぐる政権側の一連の対応に疑問を呈した。同紙は「（メディンスキー）大臣の発言は我々を危険な一線へと導く。その一線の中では、誠実性や公正性は学術書などの評価基準ではなくなり、あらかじめ用意された答えに証拠（資料）を当てはめることが容認されるようになる。歴史家は、公式見解で武装した場合にのみ立ち入れる禁断の領域を手にした……歴史家は自らを欺くことになった」と指摘し、ミロネンコに理解を示す主張を展開した。⁽¹⁰⁶⁾ もっとも、大祖国戦争史観を重視するプーチン政権の態度は変わらず、擁護論を積極的に普及させるのである。

第三節 異論の封じ込め

第一項 メディンスキー再び

プーチン大統領も映画を鑑賞したことで勢いを得たのか、メディンスキーが会長を務める「ロシア軍事・歴史協会」

はモスクワ攻防戦七五周年記念にあたる二〇一六年一月一六日から二週間にわたり、「戦争と神話」と題する展覧会をモスクワ市中心のマネージ広場で開催した。その初日にはメディンスキーも出席し、開会式の冒頭挨拶で大祖国戦争史観を否定する試みを歴史歪曲と規定して次のように発言した。

ちょうど七五年前、モスクワ近郊で、ナチス・ドイツとパンフィーロフ師団の伝説的な戦いが行われ、まさにこの日が、「パンフィーロフの二八人の戦い」として我々の歴史に刻まれたのである。……歴史を歪曲したり、モスクワ近郊におけるパンフィーロフの二八人の偉業を含む我が国民の功績に疑義を呈したりする人々の究極の目的は、国を解体し、領土と主権を奪うことである。⁽¹⁰⁷⁾

タス通信によれば、今回の展示会には、写真、展示映像、機密解除済みの文書などが展示されており、「歴史歪曲に一撃を与える」内容になっている。各ホールでは「パンフィーロフ師団」「戦争の価値」「大衆ヒロイズム」といったテーマがそれぞれ設けられ、写真などが展示されている。⁽¹⁰⁸⁾ 国営テレビ局「第一チャンネル」のニュース番組は今回の展示会を取り上げ、メディンスキーの冒頭挨拶を繰り返すように、「展示会の目的の一つが軍事史歪曲に対する闘争」だと伝えた。⁽¹⁰⁹⁾

これだけではない。メディンスキーは二〇一六年二月、自身のSNSで「シャロパ監督はロシア軍事・歴史協会の『歴史の真実のために』賞を受賞した」と発表した。⁽¹¹⁰⁾ 自身が会長を務める協会の賞を授けて映画の箔付けをすることで、パンフィーロフの二八人の偉業を強調したのであろう。メディンスキーは様々なチャンネルを通じてパンフィーロフの二八人の偉業を擁護する言論を展開していった。

このほかにも、メディンスキーは新聞紙上での発言を継続した。プーチン大統領が映画を鑑賞した後、メディンスキー

は政府機関紙『ロシア新聞』に寄稿し、パンフィーロフの二八人を改めて擁護した。今回の寄稿文では、『赤星』や軍最高檢察の報告書を要約したほか、生存者や関係者の発言も取り上げ、犠牲者は二八人ではなく百人以上になるとの発言を紹介している。その上で、「パンフィーロフ師団に所属した多くの兵士がドイツ国防軍によるモスクワ進撃を食い止め、一九四五年にベルリンを占拠した」と指摘、そして「二八人の犠牲者一人一人のおかげで、我々は今、こうして生きているのだ」と締めくくった。⁽¹¹⁾

映画「パンフィーロフの二八人」がロシア全土で公開されると、メディンスキーは、戦勝に貢献したソ連のバルチザンやパンフィーロフの二八人らは聖人だと指摘。曰く、「数百、数千もの先人たちが祖国防衛のために自らの命を捧げたのであり、彼らに対しては聖人として接するべきだ」と喝破した。⁽¹²⁾

メディンスキーは二〇一八年二月に『ロシア新聞』に新たな文章を発表し、彼が会長を務める「ロシア軍事・歴史協会」が機密解除されたパンフィーロフの二八人に関する新たな公文書を見つけたとし、「大事件」だと記した。今回の寄稿文でメディンスキーは、これまでの議論を簡単に整理した上で、機密解除された文書を要約し、パンフィーロフの二八人の功績が記された箇所を引用することで、ミロネンコ発言を批判してみせた。そして、「学者は学術論争を行うだけの十分な資料がないことを理解している。この論争というのは、学術的なものではなく、イデオロギーに基づくものである」と喝破した。⁽¹³⁾

このようにメディンスキーは、新聞紙上で擁護論を展開しつつ、自身が会長を務めるロシア軍事・歴史協会ではイベントを企画し、モスクワ防衛に貢献したパンフィーロフの二八人を称揚したのであった。こうした言論活動を目的とした米政治雑誌『ニュー・リパブリック』は、メディンスキーを「文化」を監視する「プーチン大統領の警察」であり、「大統領のご機嫌取りをしている」と揶揄した。⁽¹⁴⁾

第二項 擁護論の主流化

メデインスキのほか、国会議員や歴史家なども同様に肯定論を展開した。特にナチス・ドイツのソ連侵攻から八〇周年にあたる二〇二一年に集中した。例えば、プーチン与党「統一ロシア」の議員で、下院議長のヴァチャスラフ・ヴォロジンはナチス・ドイツによるソ連侵攻八〇周年にあたる二〇二一年六月二二日、モスクワにあるノヴォテールヴィ修道院墓地を訪れ、パンフィーロフ少将などモスクワ防衛に尽力した将官の墓石に献花した。その際、記者の取材に応じたヴォロジンは「将兵の功績を記憶し続けていく。彼らの功績、英雄的な行為が世代から世代へと継承されるようにあらゆることを行う」と述べた。⁽¹⁶⁾

ヴォロジンは六月の段階では、「将兵の功績を記憶する」と述べるに留めたが、パンフィーロフ師団によるドイツ国防軍との戦闘八〇周年記念にあたる一月一六日になるとパンフィーロフ師団を意識して発言した。議員に対して「彼ら〔パンフィーロフの二八人〕の記憶に敬意を表したい」と呼びかけると、議員全員が起立し、パンフィーロフの二八人の功績に敬意を表した。ヴォロジンは「本日一月一六日はパンフィーロフ少将率いる第三一六狙撃師団による戦闘八〇周年である。……パンフィーロフの二八人は祖国を守り、私たちが平和に暮らせるように尽力した」と発言し、彼らの功績を称えた。⁽¹⁶⁾

記念の年ということもあり、パンフィーロフの二八人に言及したのは頷けるが、同時にミロネンコ発言を念頭に置き、大祖国戦争史観の正当性を担保するために言及すべきと判断されたのであろう。というのも、二〇二一年の時点では、国営チャンネルのニュース番組などが七〇周年を取り上げたことはあったものの、今回のように下院議長などが発言することはなかった。⁽¹⁷⁾

とすると、ミロネンコ発言を契機として始まった世論を巻き込んだパンフィーロフの二八人をめぐる議論の影響もあり、ヴォロジンはプーチン与党「統一ロシア」のメンバーとしてより明確に擁護する姿勢を示したのかもしれない。彼

の態度表明を受け、下院機関紙『議会新聞』では、パンフィーロフの二八人に関する記事を多数掲載している。⁽¹¹⁾

こうして、擁護論はメディンスキーを中心に影響力を増しながら、他方でミロネンコによる懷疑論は影を潜めることになった。パンフィーロフの二八人による偉業が公に称揚されるようになったのである。

おわりに

以上のように、本稿では、モスクワ攻防戦でナチス国防軍撃破に尽力したとされるパンフィーロフの二八人をめぐる国内論争を取り上げ、大祖国戦争史観を重んじる政権の対応を明らかにした。以下では本稿の内容を簡単にまとめつつ、ロシアの歴史認識に関する今後の研究課題について記したい。

大祖国戦争を中核とする愛国主義政策が進められる中、公文書館長セルゲイ・ミロネンコがパンフィーロフの二八人の存在を否定したことで、大祖国戦争に参加した経験もある退役軍人ドミトリー・ヤーゾフが声を上げて擁護論を展開し、戦勝七〇周年にあたる二〇一五年になるとメディンスキー文化相も加わり、擁護論が勢いづいた。ウラジーミル・メディンスキーの意向もあり、映画「パンフィーロフの二八人」の製作費用の一部を文化省が支援したり、自身が会長を務める「ロシア軍事・歴史協会」を活用して各種行事を実施したりしてパンフィーロフの二八人の功績を正当化し、ミロネンコ発言の影響力を削いできた。プーチン大統領はミロネンコ発言に同調することなく、逆にメディンスキーが推す映画を鑑賞し、パンフィーロフの二八人をめぐる国内対立が繰り広げられる中、肯定的立場を間接的に示したのであった。こうして、否定論の急先鋒であったミロネンコは最終的に文書館長の職を解かれ、否定論は勢いを失い表舞台から姿を消したのであった。

以上のように、本稿では、パンフィーロフの二八人の解釈をめぐる論争を題材にして、大祖国戦争史観の擁護に努め

るプーチン政権の取り組みを明らかにしており、同政権の歴史認識に関する研究や愛国主義政策に関する研究にとって意義があるといえよう。他方で、残された課題もある。第一に、歴史認識問題に対するプーチン政権の立場・取り組みをよりクリアにする作業が求められている。二〇一四年に「ナチズムの復権」の禁止を盛り込んだ改正刑法が成立しており、今回の議論と絡めて論じることができらるだろう。その意味で、歴史認識をめぐる国内対立やその問題に対するプーチン政権の取り組みを明らかにする必要がある。

また、二〇二二年二月末に始まったロシア・ウクライナ戦争で、プーチン大統領は大祖国戦争での勝利を持ち出して軍事侵攻を正当化している。プーチンの発言を読み解き、今回の軍事侵攻を正当化するロシアの言い分を大祖国戦争史観との関係で論じる必要もある⁽¹⁹⁾。これらの課題については本稿で言及できなかったため、詳細な検討作業については他日を期したい。

※本文中における亀甲括弧は、引用者による補足説明を意味する。

注

(1) 例えば、ロシア外務省の報告書がある。О ситуации с тероизацией нацизма, распространении неонацизма и других видов практики, которые способствуют эскалации современных форм расизма, расовой дискриминации, ксенофобии и связанной с ними нетерпимости (Доклад Министерства иностранных дел Российской Федерации 2022 г.) // Министерство иностранных дел Российской Федерации, 30 августа 2022 г. (https://mid.ru/ru/foreign_policy/humanitarian_cooperation/1827824/#_top) 2765057) なお、本稿で参照したウェブサイトは二〇二三年二月二〇時点まで全て閲覧可能。

(2) 例えば、拙稿「歴史認識をめぐるロシアの国際的取り組み——国連での反ナチズム決議の採択」『政治研究』第六九号、二〇二二年、三五—七〇頁を参照。

(3) R・W・デイヴィス（内田健二・中嶋毅訳）『現代ロシアの歴史論争』岩波書店、一九九八年。

- (4) 拙著『ロシアの愛国主義——プーチンが進める国民統合』法政大学出版局、二〇一八年。
- (5) 例えば、ドイツ国防軍に果敢に挑んだバルチザンのゾーヤ・コスモデミアンスカヤを題材にした映画を製作する動きなどがある (Российская газета, 2 сентября 2013 г.; Российская газета - Неделе, 15 декабря 2016 г.)。またゾーヤの実母による伝記もあり、ゾーヤは愛国主義のシンボルの一人とされている (Космодемьянская Д. Моя Зоя, М.: Молодая гвардия, 1942; Космодемьянская Я. Д. Повесть о Зое и Шуре, М.: Детгиз, 1950)。
- (6) Российская газета, 2 июля 2020 г.
- (7) 松井康浩「エゴ・ドキュメントをめぐる後期ソ連の歴史実践」長谷川貴彦編『エゴ・ドキュメントの歴史学』岩波書店、二〇二〇年、二六四、二六七頁。
- (8) Общественное мнение - 2020. М.: Левада-Центр, 2021, С. 30.
- (9) 横手慎二『スターリン——「非道の独裁者」の実像』中公新書、二〇一四年。
- (10) 拙稿「現代ロシアの歴史認識問題——共産党によるスターリン再評価」『政治研究』第六七号、二〇二〇年、三五—六九頁。
- (11) Тимшина Е. Д. Историческая политика российских коммунистов на современном этапе // Исторический журнал: научные исследования, № 5, 2022, С. 131-143.
- (12) プーチン大統領の過去に、スターリンの政治弾圧を認めつつ、戦勝に導いた彼の指導力も考慮すべき旨発言している (例えば、拙著『ロシアの愛国主義』、四九—五〇頁)。
- (13) 二〇一三年四月、モスクワ市裁判所はカラムルザに対して国家反逆罪などの罪で二五年の禁固刑を言い渡した (Российская газета, 18 апреля 2023 г.)。
- (14) Известия, 5 сентября 2015 г.
- (15) 拙著『ロシアの愛国主義』は二〇一二年頃までのプーチン政権の愛国主義政策をまとめており、本稿の議論はその後の展開を含めたものである。
- (16) Anton Weiss-Wendt, *Putin's Russia and the Falsification of History: Reasserting Control over the Past*, London: Bloomsbury Academic Press, 2020.
- (17) Anton Weiss-Wendt and Nanci Adler, eds., *The Future of the Soviet Past: The Politics of History in Putin's Russia*, Bloomington: Indiana University Press, 2021.
- (18) Marlene Laruelle, *Is Russia Fascist?: Unraveling Propaganda East and West*, Cornell University Press, 2021. ユーレース・フリナム

ル (浜田樹子監) 『ファシズムとロシア』 東京堂出版、二〇一二年。

- (19) *Колосов Н.* Память старого режима. История и политика в России, М.: Новое литературное обозрение, 2011, С. 163.
- (20) *Давленко В.* Патриотический вклад населения Средней Азии и Казахстана в победу в Великой Отечественной войне 1941-1945 годов // Вестник Челябинского государственного университета, № 1, 2003, С. 201.
- (21) Красная звезда, 27 ноября 1941 г.
- (22) Красная звезда, 28 ноября 1941 г.
- (23) Красная звезда, 22 января 1942 г.
- (24) Герои Советского Союза: Краткий биографический словарь в двух томах. Т. 2, М.: Военное издательство, 1988, С. 233.
- (25) Красная звезда, 22 июля 1942 г.
- (26) *Бек А.А.* Волоколамское шоссе, Красноярск: Красноярское книжное издательство, 1960.
- (27) *Ряинский Я.З.* Полный словарь названий московских улиц, М.: Информполиграф, 2011, С. 105.
- (28) Правда, 7 мая 1975 г.; Советская культура, 9 мая 1975 г.
- (29) Великая Отечественная война 1941-1945: Энциклопедия / Гл. ред. М. М. Козлов, М.: Советская энциклопедия, 1985, С. 526.
- (30) 例²⁵ *Тихонов В.В.* Герои Великой Отечественной войны в российских школьных учебниках // Преподавание военной истории в России и за рубежом: Сб. ст. Вып. 2, М.: СПб.: Нестор-История, 2019, С. 118-132.
- (31) Государственная Дума. Стенограмма заседаний. Т. 32, 2006 г. Осенняя сессия. 8-22 декабря, М.: Издание Государственной Думы, 2008, С. 130.
- (32) *Медведева К.* Затянувшаяся «советскость» и трансформации коллективной памяти: советские и постсоветские мемориальные комплексы в Казахстане // Новое литературное обозрение, № 1, 2020, С. 263.
- (33) В Бишкеке почтили память героев-панфиловцев // Вечерний Бишкек, 19 ноября 2019 г. (https://www.vb.kg/doc/383337_v-bishkeke-roshiti_pamiat_geroev_panfilovcev_video.html)
- (34) ロシアと旧ソ連諸国の共通の記憶について は、拙稿『戦勝とソ連の共通の記憶——CIS諸国との協力によるロシアの歴史認識の正當化』『政治研究』第七〇号、二〇一三年、七一—一〇頁を参照。
- (35) Комсомольская правда, 7 июля 2011 г.
- (36) Там же.

- (37) 田中連最後の元帥デニチリ・ヤーンフは、二〇一〇年二月に九五歳で亡くなり、国営メディア等で取り上げられた (Российская газета, 26 февраля 2020 г.)°.
- (38) Советская Россия, 2 сентября 2011 г.
- (39) Комсомольская правда, сентября 2011 г.
- (40) Язов Д. Т. Панфиловцы в боях за Родину. М.: Красная звезда, 2011.
- (41) Дроздов К. Героев было не только двадцать восемь // Родина, № 5, 2012, С. 6-11; № 7, С. 8-16.
- (42) Язов Д. Т. Удары судьбы. Воспоминания солдата и маршала, М., Центрполиграф, 2014, С. .
- (43) Коммерсантъ, 22 апреля 2015 г.
- (44) Справка-доклад главного военного прокурора Н. Афанасьева "О 28 панфиловцах" // Сайт Государственного Архива РФ (<https://statearchiv.ru/607>)
- (45) Там же.
- (46) Кардин В. Легенды и факты // Новый мир, № 2, 1966, С. 237-250.
- (47) Петров Н., Эдельман О. Новое о советских героях // Новый мир, № 6, 1997, С. 140-151. 同論文によれば、公文書館に保存されるこの軍最高検察作成の報告書の整理番号は「Государственный архив Российской Федерации, ф. Р-8131 сч., оп. 37, д. 4041, лл. 310-320 の由°.
- (48) Российская газета - Неделя, 7 мая 2015 г.
- (49) Российская газета, 11 июня 2015 г.
- (50) В Москве начал работу X VII Всемирный конгресс русской прессы // ТАСС, 10 июня 2015 г.
- (51) Родина, июль 2015 г., С. 1.
- (52) 独立系ラジオ放送局「エヌエフのうた」 (<https://www.svoboda.org/a/27065504.html>)°
- (53) 独立系ラジオ放送局「エヌエフのうた」 (<https://www.svoboda.org/a/27138620.html>)°
- (54) Собрание законодательства российской Федерации (СЗРФ), № 17, Ст. 2118, 2013.
- (55) Российская газета, 27 апреля 2015 г.
- (56) *Меднскийкий В. Р.* Война. Мифы СССР. 1939-1945, М.: ОЛМА медиа групп, 2011, С. 221-245.
- (57) Меднскийкий — РБК: «Кто у нас либералы? Интернет-кликуши и их кумиры?» // РБК, 13 июля 2015 г.

- (https://www.gbrs.ru/ins/technology_and_media/13_07/2015/55a26ffa9a7947fda87211c2)
- (68) Мединский призвал руководство Госархива не давать собственных оценок архивным документам // ТАСС, 30 июля 2015 г. (<https://tass.ru/kultura/2154088>)
- (69) Мединский призвал работников Госархива воздержаться от оценок // ВЕСТИ.ru, 30 июля 2015 г., (<https://www.vesi.ru/article/1713592>)
- (70) Новая газета, 3 августа 2015 г.
- (71) Аргументы и Факты, № 32, 5 августа 2015 г., С. 11-12.
- (72) Российская газета, 26 августа 2015 г.
- (73) Коммерсантъ, 24 декабря 2015 г.
- (74) Огонёк, № 45, 14 ноября 2016 г., С. 41.
- (75) Владимир Мединский: Науке ничего не известно про 10 миллионов сосланных кулаков // Интерфакс, 22 марта 2016 г. (<https://www.interfax.ru/interview/499707>)
- (76) Ничего страшного в моем уходе нет // Коммерсантъ, 16 марта 2016 г. (<https://www.kommersant.ru/doc/2939112>)
- (77) Уволенный директор Госархива РФ: Я - не сумасшедший, чтобы ослепывать "подвиг 28 панфиловцев" // Настоящее время, 24 марта 2016 г. (<https://www.sputniktime.tv/a/27632943.html>)
- (78) Latuete, *op.cit.*, p. 130. 「トニシマスロウト」 一一一頁。
- (79) Уволенный директор Госархива РФ: Я - не сумасшедший, чтобы ослепывать "подвиг 28 панфиловцев" // Настоящее время, 24 марта 2016 г. (<https://www.sputniktime.tv/a/27632943.html>)
- (80) История и политика: как наше настоящее и будущее связаны с нашим прошлым? Тридцатые губернаторские чтения Тюмень, 10 октября 2017 г. // Политика, № 4, 2017, С. 161.
- (81) Миллер А., Лукьянов Ф. Декастеро от национального нарциссизма // Россия в глобальной политике, № 5, 2015, С. 132.
- (82) СЗРФ, № 15, 2016, Ст. 2069.
- (83) Россия́的文書館を紹介したものととして、例えば、横手慎二「ロシアの文書館事情」『現代史研究』第四七号、二〇〇一年、九二—九八頁などがある。
- (84) СЗРФ, № 1006, 1992, Ст. 303; № 1177, 1996, Ст. 4082; № 1562, 1998, Ст. 203.

- (15) СЗРФ, № 177, 2004, Ст. 1470; № 314, 2004, Ст. 945.
- (16) СЗРФ, № 51, 2009, Ст. 6367; Российская газета, 17 декабря 2009 г.
- (17) СЗРФ, № 15, 2016, Ст. 2076.
- (18) Встреча с руководителем Федерального архивного агентства Андреем Артюзовым // Сайт администрации Президент России, 4 апреля 2016 г. (<https://www.kreml.ru/events/president/news/51635>) ; Российская газета, 5 апреля 2016 г.
- (19) В Ново-Огарево прошла встреча президента Владимира Путина и главы Росархива Андрея Артюзова // ВЕСТИ.Ру, 4 апреля 2016 г. (https://www.ltv.ru/news/2016-04-04/299720-v_novo-ogarevo_prosha_vstrecha_prezidenta_vladimira_putina_i_glavu_rosarhiva_andreya_artiozova)
- (20) Встреча Президента РФ Владимира Путина с руководителем Росархива Андреем Артюзовым // Сайт ГАРФ, 4 апреля 2016 г. (<https://statearchiv.ru/697>)
- (21) Российская газета, 5 апреля 2016 г.; 6 апреля 2016 г.
- (22) Российская газета, 7 апреля 2016 г.
- (23) Российская газета, 14 апреля 2016 г.
- (24) Росархив собрался переподчинить главе государства уже в понедельник // Интерфакс, 4 апреля 2016 г. (<https://www.interfax.ru/russia/501906>)
- (25) СЗРФ, № 26, 2016, Часть I, Ст. 4034.
- (26) Зчем президенту Росархив // Ведомости, 5 апреля 2016 г. (<https://www.vedomosti.ru/opinion/articles/2016/04/05/636439-presidentu-rosarhiv>)
- (27) Там же.
- (28) Рыжовцева Е. Умер по секрету // Радио свобода, 5 апреля 2016 г. (<https://www.svoboda.org/a/27656135.html>)
- (29) Министр культуры поддерживает создание фильма "28 панфиловцев" // ТАСС, 25 ноября 2013 г. (<https://tass.ru/culture/787860>)
- (30) Российская газета, 29 ноября 2013 г.
- (31) Режиссёр фильма «28 панфиловцев»: «Отступать некуда» // Аргументы и факты, 16 ноября 2014 г. (<https://aif.ru/culture/movie/1382520>)

- (26) Фильм "28 панфиловцев" собрал рекордную сумму народных пожертвований - 34 млн рублей // ВЕСТИ.Ru, 23 октября 2015 г. (<https://www.vesti.ru/article/1738590>)
- (27) Вечерняя Москва, 4 августа 2015 г.
- (28) Российская газета, 23 июля 2015 г.
- (29) Российская газета - Неделя, 19 ноября 2015 г.
- (30) Российская газета, 11 ноября 2016 г.; Российская газета - Неделя, 17 ноября 2016 г.
- (31) Российская газета, 7 декабря 2016 г.
- (32) *Грибан И.В., Антропов К.А.* Кино и память: Великая Отечественная война в зеркале современного российского кинематографа // Запад, Восток и Россия: Вопросы всеобщей истории, Вып. 23, 2020, С. 329-330.
- (33) Российская газета, 28 декабря 2016 г.
- (34) В центре Москвы появилось граффити, посвященное фильму "28 панфиловцев" // ТАСС, 24 ноября 2016 г. (<https://tass.ru/obschestvo/3809568>)
- (35) Путин и Назарбаев после форума в Астане посмотрели фильм "28 панфиловцев" // РИА Новости, 4 октября 2016 г. (<https://ria.ru/20161004/1478485516.html>)
- (36) Владимир Путин и Нурсултан Назарбаев посмотрели новый фильм «28 панфиловцев» // Первый канал, 4 октября 2016 г. (https://www.1tv.ru/news/2016-10-04/311287-vladimir_putin_i_nursultan_nazarbaev_posmotreli_novyy_film_28_panfilovtsev)
- (37) Президенты России и Казахстана посмотрели фильм «28 панфиловцев» // Сайт администрации Президента России, 4 октября 2016 г. (<http://www.kremlin.ru/events/president/news/53021>)
- (38) Посещение показа кинофильма «Двадцать восемь панфиловцев» // Сайт Президента Республики Казахстан, 4 октября 2016 г. (https://www.akorda.kz/ru/events/astana_kazakhstan_participation_in_events/roshesheche-rokaza-kinofilma-dvadsat-vosem-panfilovtsev)
- (39) Медиаинский назвал "конченными мразями" сомневающихся в подвиге панфиловцев // РИА Новости, 4 октября 2016 г. (<https://ria.ru/20161004/1478502045.html>)
- (40) Независимая газета, 6 октября 2016 г.
- (41) Выставка «Война и мифы» - удар по фальсификаторам истории // Российское военно-историческое общество, 16 ноября

- 2016 г. (<https://tvio.hisnrg.ru/activities/news/vystavka-voyna-i-mify-udar-fo-falsifikatoram-istorii>)
- (88) Выставка "Война и мифы" открылась в московском Манеже // ТАСС, 16 ноября 2016 г. (<https://tass.ru/obschestvo/3787963>)
- (89) В Манеже к 75-летию битвы за Москву открылась выставка «Война и мифы» // Первый канал, 16 ноября 2016 г. (https://www.1tv.ru/news/2016-11-16/314173-ч_75_letiyu_bivu_za_moskvu_otkrylas_voyna_i_mify)
- (10) Режиссер "28 панфиловцев" получил награду "За верность исторической правде" // ТАСС, 8 декабря 2016 г. (<https://tass.ru/kultura/3854589>)
- (11) Российская газета - Неделя, 6 октября 2016 г.
- (12) Российская газета, 28 ноября 2016 г.
- (13) Российская газета, 3 декабря 2018 г.
- (14) Stephen Norris, "War, Cinema, and the Politics of Memory in Putin 2.0 Culture" in Weiss-Wendt and Adler, eds., *op.cit.*, p.186.
- (15) Вячеслав Володин: никогда не забудем, какой ценой завоевана Победа // Государственная Дума РФ, 22 июня 2021 г. (<http://duma.gov.ru/news/51801/>)
- (16) Депутаты почтили память героев-панфиловцев // Государственная Дума РФ, 16 ноября 2021 г. (<http://duma.gov.ru/news/52728/>)
- (17) 70 лет назад 28 панфиловцев остановили немцев практически на подступах к Москве // Первый канал, 16 ноября 2011 г. (https://www.1tv.ru/news/2011-11-16/107032-70_let_nazad_28_panfilovtsev_ostanovili_nemtsev_prakticheski_na_podstupah_k_moskve)
- (18) Появиу героев-панфиловцев исполнилось 78 лет // Парламентская газета, 16 ноября 2019 г. (<https://www.rpr.ru/social/rodvigu-geroev-panfilovtsev-ispolnjos-78-let.html>): Появиу панфиловцев исполнилось 79 лет // Парламентская газета, 16 ноября 2019 г. (<https://www.rpr.ru/social/rodvigu-panfilovtsev-ispolnjos-79-let.html>)
- (19) 拙稿「現代ロシアにおける愛国主義——国民統合の基本理念」『モラミア研究』第五八号、二〇一八年、二一七頁。
- (20) 二〇二二年十一月、ロシアが一方的に併合したウクライナ東部のマリウポリおよびメリトポリに対して、ロシアの名誉称号「軍事栄光都市」が贈られた (СЗРФ, № 827, 2022, Ст. 8193; № 828, 2022, С. 8194; Российская газета, 16 ноября 2022 г.).